

年度評価シート

課名 文化振興課

施設の名称 静岡科学館	指定管理者名 (公財) 静岡市文化振興財団
<p>1 履行状況</p> <p>業務仕様書及び事業計画書に従って概ね適切に履行されている。</p> <p>(1) 維持管理業務</p> <p>展示物をはじめ、空調設備、エレベーター、防火シャッター、券売機の保守点検、建築基準法に基づく遊戯施設、昇降機の定期点検及び館内清掃業務について、専門知識を有する第三者委託により実施し、各業務とも事業計画に従って適切に行われている。</p> <p>また、10階空調機機械室電気設備修繕等23件の修繕を適宜実施し、来館者が安全で快適に利用できるよう努めている。</p> <p>その他、消防設備、機械警備及び防火対象物定期点検等、ビルの管理組合が一括して行う保守点検業務について、管理組合と連携し適切に行われている。</p> <p>(2) 施設利用者数</p> <p>令和4年度の入館者数は161,063人(大人51,774人、小人109,289人)で、令和3年度(入場者数110,813人)と比較し約46%の増加となった。また、指定管理者業務仕様書に定めた目標入館者数255,000人を下回ったが、新型コロナウイルス感染症拡大による入館者数の減少が影響しているものと考えられる。</p> <p>(3) 事業実施状況</p> <p>5月中旬より新たに土曜日に「る・く・る展示トーク」を位置づけ、44日間で目標人数である2,250人を大幅に上回る4,530人が来場した。来館者の発達段階に合わせて補完的な用具を使った科学コミュニケーションを行うことで、疑問や興味を引き出すような体験プログラムを実施した。新型コロナウイルス感染状況が落ち着いてきた7月からは、休止していた「ふしぎな音の部屋」「さかさメガネ」などの展示物や、る・く・るナビゲーターによる展示物体験支援を再開し、展示フロアでの科学コミュニケーションの充実を図った。「オトナ楽しむカガクカン」では、中秋の名月やハロウィンに合わせ、天体望遠鏡による月の観察、サイエンスショー、館内装飾などを行ったことで、来館者は季節を感じながら科学体験を楽しむことができた。</p> <p>また、「サイエンスフェスティバルinる・く・る」「サイエンスピクニック」などの大型イベントは、出展数を絞り、ブース配置や出展日の振り分けなどの感染防止対策をすることで、通常に近い形態で実施することができた。「る・く・る×ラボ」では、静岡大学、東海大学、静岡県立大学、SUS、興津螺旋、林業研究会と連携し、連携先訪問も4回実施するなどプログラムの幅を広げることができた。静岡県内の大学や企業の研究現場を訪問し、科学館内では体験できない専門性の高い知識や経験を提供することで、地域との連携推進に努めた。</p> <p>市内の児童相談所や院内学級、福祉施設を訪問して授業を支援する「移動科学館」は15回200人の利用があった。場所や参加者の状況に合わせてプログラムを工夫すること</p>	

で、疾病や貧困、家庭環境等により学習機会の少ない子どもたちに対しても科学に触れる機会を提供できた。

入館者の来場を待つだけではなく、積極的に行政や、市民団体、他施設との連携事業に取り組む姿勢は大変評価できる。今後も様々な団体との連携事業により、科学に親しむ市民層が厚くなることに期待する。

主な事業の参加者数は以下のとおり

事業名	来場者数	目標値	達成率
サイエンスショー(全21回)	3,647人	5,280人	69.1%
テーブルサイエンス(全20回)	2,458人	2,400人	102.4%
わくわく科学工作(全19回)	2,834人	4,000人	70.9%
めばえのかがく(全13回)	723人	480人	150.6%
る・く・る展示トーク	4,530人	2,250人	201.3%
オトナ楽しむカガクカン	428人	320人	133.8%

2 市民（利用者）からの意見・要望の内容とその対応状況の評価（クレーム対応 等）

利用者からの意見・要望に対しては、概ね適切な対応がとられている。即時の対応が困難な要望に対しても前向きに検討しており、良好な対応がなされているといえる。

[具体的な意見・要望と対応状況]

（職員の対応等に対する意見）

利用者からの意見：

ワンダーホール、重さや密度、様々な素材でやるとどうなるか知りたいです。三角や四角だとどうなるんですか？館長様、スタッフの皆様の回答、説明分かりやすかったです！！またお願いします。

対応：

館長が直接電話連絡し、次回来館時、展示物を用いて説明することとした。

3 市民（利用者）へのアンケートや満足度調査の状況評価

（1）利用者満足度調査

事業に関するアンケート調査を実施している。満足度が「とても楽しい」「楽しい」と回答した割合が99.3%と、市民の期待に応える事業の展開が図られていると言える。

（2）市民アンケート

令和4年度に（公財）静岡市文化振興財団が指定管理を受託する市内文化施設等で実施した市民アンケートによると、静岡科学館の認知度は73.6%、利用度は48.9%であった。依然として他の文化施設等と比較しても認知度は高く、広く施設の存在が知られていると言える。引き続き、積極的な広報活動や科学への興味・関心を高める事業の企画を実施し、認知度や利用度を高めていくことを期待する。

（3）その他の調査

施設内に投書形式の「利用者の声」を設置し、施設利用者に随時、意見・要望や施設満足度について調査している。各項目の「満足」「やや満足」の回答率は下記のとおり。

① 職員の対応 89.7%（前年度 95.6%）

- ② 清掃、整理整頓 92.9% (前年度 97.5%)
- ③ 案内表示、掲示板 89.0% (前年度 96.5%)
- ④ 開館日・開館時間 89.1% (前年度 97.1%)
- ⑤ 空調・音響・照明等 88.2% (前年度 96.7%)

ほとんどの項目において、「満足」「やや満足」と回答した人の割合が前年度よりも低い数値を示している。しかしながら、来館割合については77.3%がリピーターであるため、着実にファンが定着していることが伺える。今後もこの水準を保つために、日頃から職員一人ひとりが気持ちの良い対応と、良好な施設環境の維持に心がけていただきたい。

また、令和4年度は新型コロナウイルス感染症の影響により年1回となったが、科学館運営協議会を開催し、外部からの意見・要望を積極的に取り入れる体制が整えられている。提言をもとに、より良い施設運営となるよう取り組む姿勢は評価できるものであり、今後の事業計画及び個々の事業計画に指摘事項等が反映されることが期待される。

4 指定管理者の経理状況の評価

静岡科学館の収支状況については、新型コロナウイルス感染症の影響を除いて概ね予算のとおりにより執行されており良好である。施設の更なる利用率向上による利用料金収入等の増と、施設の効率的な運営を期待したい。

5 総括的な評価（課題事項・指摘事項及びそれらの改善状況 など）

前年度事務事故発生の有無	無
前年度モニタリング調査における改善協議事項の有無	無

《新型コロナウイルス感染症への対応》

新型コロナウイルス感染症への対応については、市の要請に基づき、適切な時期からイベントの自粛等の対応が図られた。この際の利用者への周知については、速やかにホームページへの掲出を行う等、適切な時期・方法により行われている。

事業については、コロナ禍を踏まえた手法を検討し、業務を実施しており、指定管理者の創意工夫が見られた。

管理運営全般に関しては、事業計画に従い概ね良好に実施されている。また、指定管理者の決算収支の状況は良好である。

施設管理については、環境維持のための各種設備諸種点検業務や館内清掃業務など適切に実施されている。次年度以降も、経年による施設劣化や定期点検の結果などに留意し、適切な管理運営の継続を求める。各展示物に内在する特性を生かし、体験者が想像力、創造力を働かせることによって新たな発見を促す展示体験支援を引き続き実施するとともに、今後の展示物更新を見据え、来館者ニーズの積極的な調査を行い、満足度の向上に努めていくことを期待する。

事業においては、令和3年度から継続して実施している大人限定の夜間開館事業「オトナときめくサイエンス」では、石磨き、月探査機をテーマにした講演、鉱物結晶づくり、スマホ顕微鏡を使った藻の観察の4回の講座を実施したが、一步踏み込んだ内容でスタッフと科学コミュニケーションを取る人や展示体験をする人の姿が見られた。どの講座も盛況であり、大人層のニーズを掘り起こすことができた。

ボランティアとして育成している「る・く・るナビゲーター支援事業」の活動は、ボ

ランティアとして73人の登録があり、昨年度の1.4倍となる延べ684人の活動があった。7月からは新型コロナウイルス感染症の影響により開催していなかった展示物体験支援が3年ぶりに再開され、順調に活動数が回復している。ナビゲーターの多くは自主活動やイベント前に行う研修に積極的に参加し、ボランティア指導者としての質を高めており、静岡科学館が人材育成に取り組んできた成果であると評価する。

広報活動については、SNSを活用し、職員の活動の様子や科学コラム、イベント時の写真や動画などを公開した。家庭で楽しめる映像コンテンツを制作し、動画配信にも積極的に取り組んでおり、新しい取組として大いに評価する。

今後とも積極的な広報活動や、展示の工夫、市民のニーズに応じた事業の展開に期待する。また、中高生や大人を対象にした事業を実施することで、幅広い年齢層の市民に対して科学へ関心を持つ機会を提供するなど、引き続き新たな利用層の拡大に努めてほしい。

※事務事故が発生したとき及びモニタリングにおいて改善の指導があったときは、必ず改善状況を記載すること。